

「研究授業実施状況に関する調査」

集計結果の概要

平成25年7月

東京学芸大学

「国際算数・数学授業改善のための自己向上機能を
備えた教員養成システム開発」

文部科学省特別経費（プロジェクト分）
「国際的に卓越した教育研究拠点機能の充実」による調査研究

本調査は、日本の研究授業の実施状況を把握し、授業研究を通じた現職教員研修や教員養成の充実並びに国際貢献のための基礎資料を得ることを目的として行いました。日本の「授業研究」は、“The Teaching Gap” (Stigler & Hiebert, 1999)以降、世界的に注目されるとともに、算数科の授業及び授業研究が高く評価されています。そのような国際的な状況下において、現在の、日本国内の小学校、中学校、高等学校数学科における研究授業が、どのような目的で行われ、どのような成果が得られているのかを検証したいという思いが、本調査を行ったきっかけです。

全国の公立小・中・高等学校から無作為に抽出した学校 2,680 校に、研究授業の実施状況に関する質問紙を送付し、回答いただきました。その結果、平成 23 年度に算数・数学の研究授業を参観も実施もしていない教員が小学校で 16%、中学校で 11%、高等学校で 21%いたことや、授業後の協議会を行わなかった研究授業が小学校で 6%、中学校で 11%、高等学校で 22%あったこと等が明らかになりました。さらに、小学校では、授業の構成要素である「目標」「教師」「子ども」「教材」の 4 つに関する検討がおおむねなされていますが、中学校では、校内研究において「目標」「教材」に関する検討が、地域の研究授業では「子ども」に関する検討が不足する傾向があることがわかりました。また、高等学校では「教師」に関する検討に偏る傾向があることも明らかになりました。本調査結果を、各校での「研究授業」、さらには近年増えつつある小・中の連携型の「研究授業」や中・高一貫校の「研究授業」の充実を図る上でご活用いただければ幸いです。なお、本調査結果に関する分析は、日本数学教育学会誌 算数教育 第 95 巻第 6 号に「日本における算数・数学研究授業の実施状況に関する調査研究」として掲載されています。あわせてご覧ください。

質問紙への回答にご協力をいただいた全国の小学校・中学校・高等学校の先生方に、心から感謝申し上げます。

「国際算数・数学授業改善のための自己向上機能を
備えた教員養成システム開発」

研究代表 藤井 斉亮

1. 調査の目的

日本の小・中・高等学校における算数・数学の研究授業の実施状況を明らかにし、授業研究を通じた現職教員の研修や教員養成の一層の充実ならびに国際貢献のための基礎資料を得る。

2. 調査の方法

(1) 調査方法

郵送による質問紙調査法とした。

(2) 調査対象

全国の公立小学校、公立中学校、全日制課程を置く公立高等学校から、以下に述べる方法により、小学校 1000 校、中学校 1000 校、高等学校 680 校、合計 2680 校) を抽出し、小学校は校務分掌上の算数部会の教員、中学校・高等学校は数学科教員に回答を依頼した。

小・中学校については、次のように層別 2 段抽出を行った。まず、学校の所在地の地域類型により大都市（東京 23 区および政令指定都市）及び人口 30 万人以上の市（前記以外の市で中核市を含む）（Ⅰ層）と、その他の市、町村部（Ⅱ層）の 2 つの層に分類し、各層の母集団の学校数に比例するように各層の抽出校数を決めた。次に、各層から調査対象とする区市町村を無作為に抽出した。そして、それらの区市町村の学校一覧から無作為抽出で調査対象校を決めた。

高等学校については、次のように層別 2 段抽出を行った。まず、都道府県公立高等学校数が 100 以上（Ⅲ層）と 100 未満（Ⅳ層）の 2 つの層に分類し、各層の母集団の学校数に比例するように各層の抽出校数を決めた。次に、各層から調査対象とする都道府県を無作為に抽出した。そして、それらの都道府県の学校一覧から無作為抽出で調査対象校を決めた。

表 1 抽出計画（小学校）

層	校種 区市町村数	公立小学校		1 段抽出	2 段抽出	抽出数計
		母集団	抽出計画数	区市町村	抽出数	
Ⅰ	94	6,482	298	15	20	300
Ⅱ	1,648	15,231	702	70	10	700
計	1,742	21,713	1,000	85	---	1,000

表 2 抽出計画（中学校）

層	校種 区市町村数	公立中学校		1 段抽出	2 段抽出	抽出数計
		母集団	抽出計画数	区市町村	抽出数	
Ⅰ	94	3,010	302	15	20	300
Ⅱ	1,648	6,972	698	70	10	700
計	1,742	9,982	1,000	85	---	1,000

表3 抽出計画（高等学校）

層	校種 都道府県数	公立高等学校		1 段抽出	2 段抽出	抽出数計
		母集団	抽出計画数	都道府県	抽出数	
Ⅲ	10	1,537	299	7	40	280
Ⅳ	37	2,065	401	20	20	400
計	47	3,602	700	27	---	680

※抽出元データは『平成 23 年度全国学校総覧』（2011，全国学校データ研究所，原書房）より

※各層の学校数は「平成 22 年度学校基本調査 閲覧公表（市町村別集計）」より

※層別 2 段抽出をしたのは，近くに同校種の学校があるかどうかで，地域や研究グループでの研究授業の行いやすさに差異があると考え，その偏りをなくすためである。

(3) 調査項目

調査項目は，以下の Q1～Q11 の通りである。

I 基本情報

- Q1. 学校種と所在都道府県名
- Q2. 教員数(常勤のみ)，数学科教員数（小学校の場合は，校務分掌上の算数部会の人数）
- Q3. 教職経験年数（非常勤等経験年数を含む）

II 昨年度（23 年度）の研究授業の実施状況

- Q4. 研究授業を参観したか。
- Q5. 参観した研究授業のタイプと参観回数
- Q6. 研究授業を授業者として実施したか。
- Q7. 授業者として実施した算数・数学の研究授業の「位置づけ」「研究テーマ」「参観者」「協議会の有無」について
- Q8. 算数・数学の研究授業のために学習指導案を作成する機会があったか。
- Q9. 実施した各研究授業における学習指導案の記載内容，検討方法

III 算数・数学の研究授業に関する考え方

- Q10. 算数・数学の研究授業を「授業者として実施する場合」と「参観する場合」において，重要だと思われる目的・理由。
- Q11. 算数・数学の研究授業を通して，あなたが一番学んだこと。（自由記述）

3. 調査結果

調査は、2012年7月～9月に行った。各校種の有効回答率ⁱは、表4の通りである。

表4 回収結果

	回答数（回収率）	有効回答数
小学校	412(41.2%)	408
中学校	407(40.7%)	405
高等学校	316(46.5%)	316
校種不明	24	0
合計	1159	1129

I. 基本情報

Q2. 貴校の教員数（常勤）についてお聞きます。〔各数値回答〕

教員数（常勤）	うち数学科教員数※
<input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> 人	<input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> 人

※小学校の場合は、校務分掌上の算数部会の人数を
ご記入ください。

分析の対象となった学校の常勤教員数の平均は、小学校 19.80 人、中学校 21.68 人、高校 51.16 人であった（図1）。常勤教員数のうち算数・数学科教員数の平均は、小学校 2.79 人、中学校 3.04 人、高校 6.35 人であった（図2）。

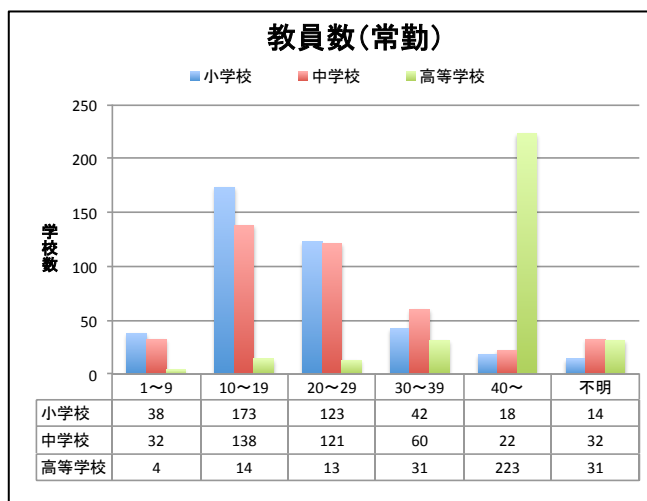


図 1

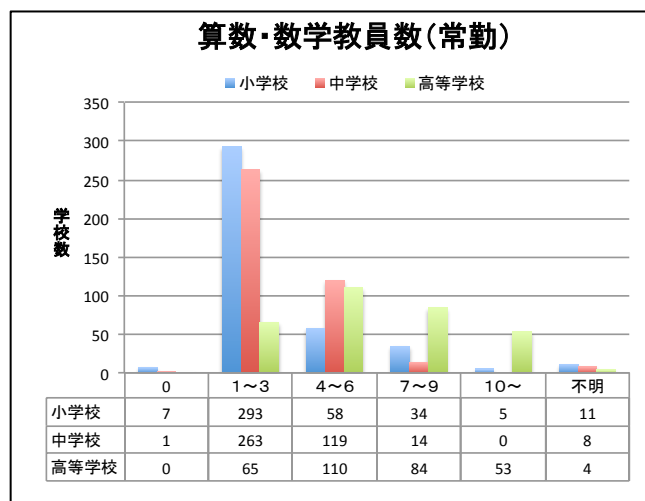


図 2

Q3. あなたの教職経験年数についてお聞きます。〔数値回答〕

<input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> 年	※非常勤等の経験年数を含む
---	---------------

教職経験年数の全体平均は 19.77 年であった。

(小学校 21.36 年、中学校 18.06 年、高等学校 19.90 年)

(3) 算数・数学以外の研究授業の参観回数 (図5) ※空欄のものは「0回」に含めた。

(4) 参観した算数・数学以外の研究授業のタイプ (図6)

小学校では、参観した研究授業 (のべ回数) のうち 69%, 中学校では 75%が「校内研究会」で最も多い。また、高等学校においては「初任者研修や 10 年次研修等の一環」が 34%と、小・中と比べて多い。

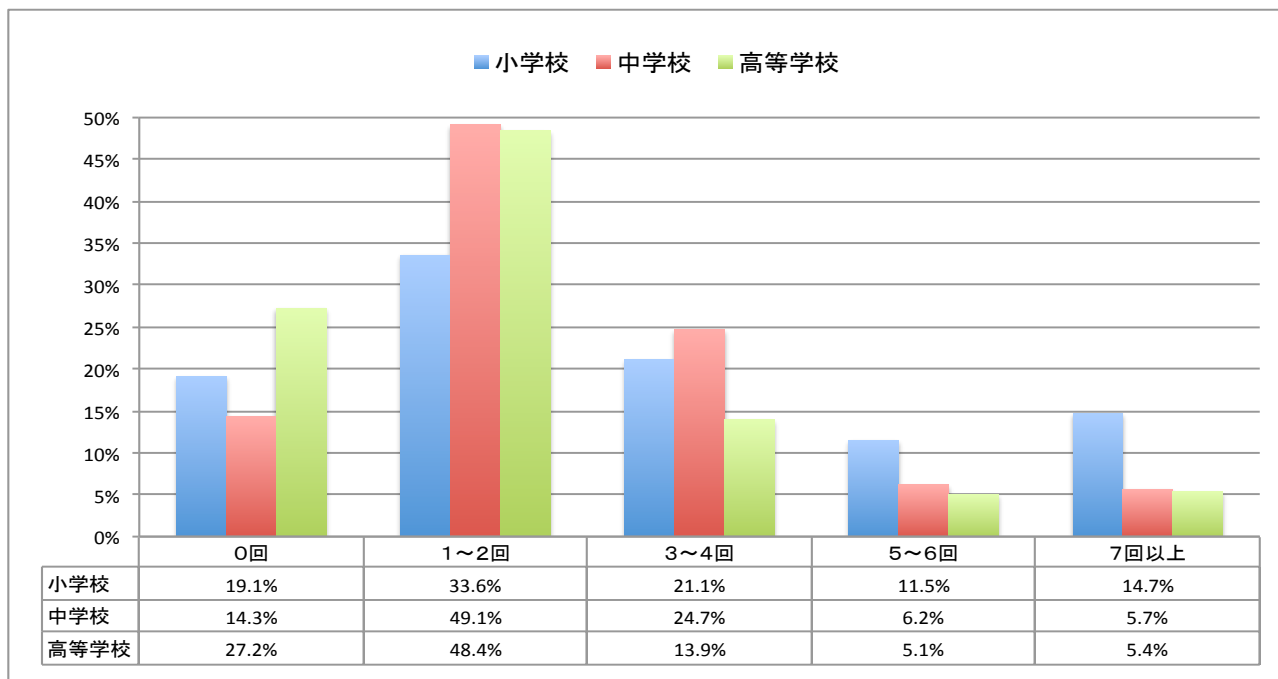


図 3 算数・数学の研究授業の参観回数

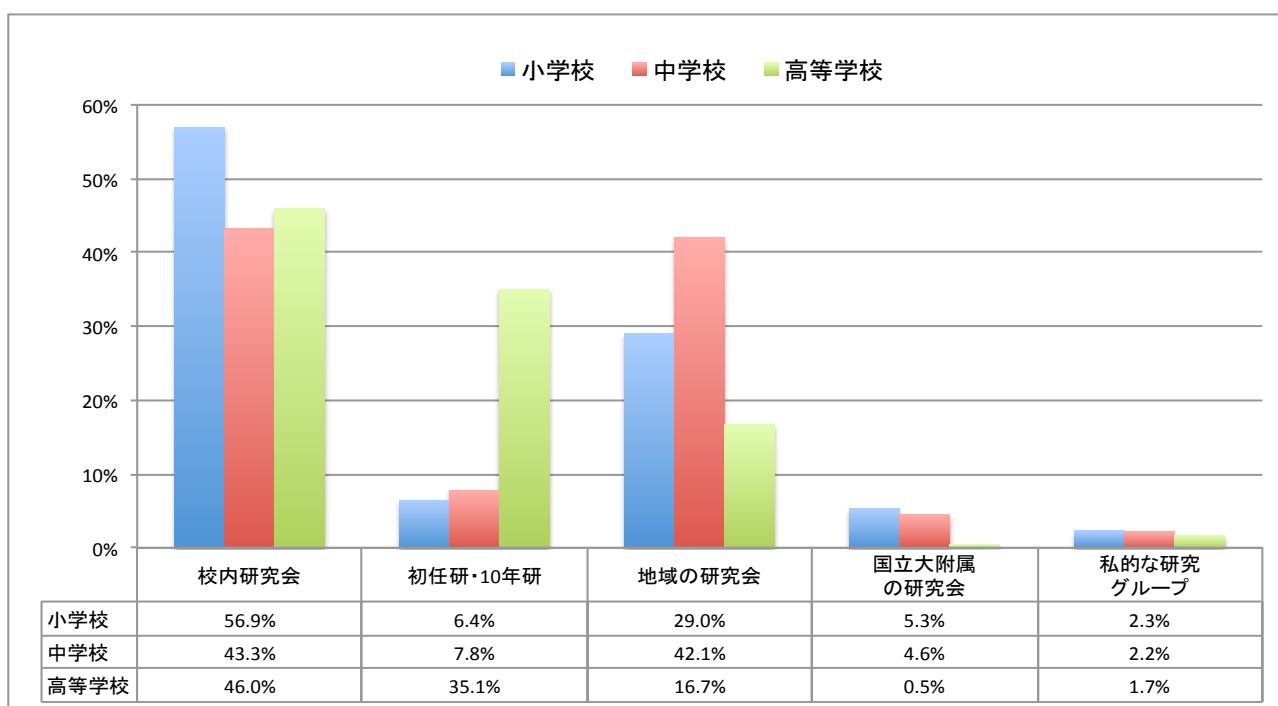


図 4 参観した算数・数学の研究授業のタイプ

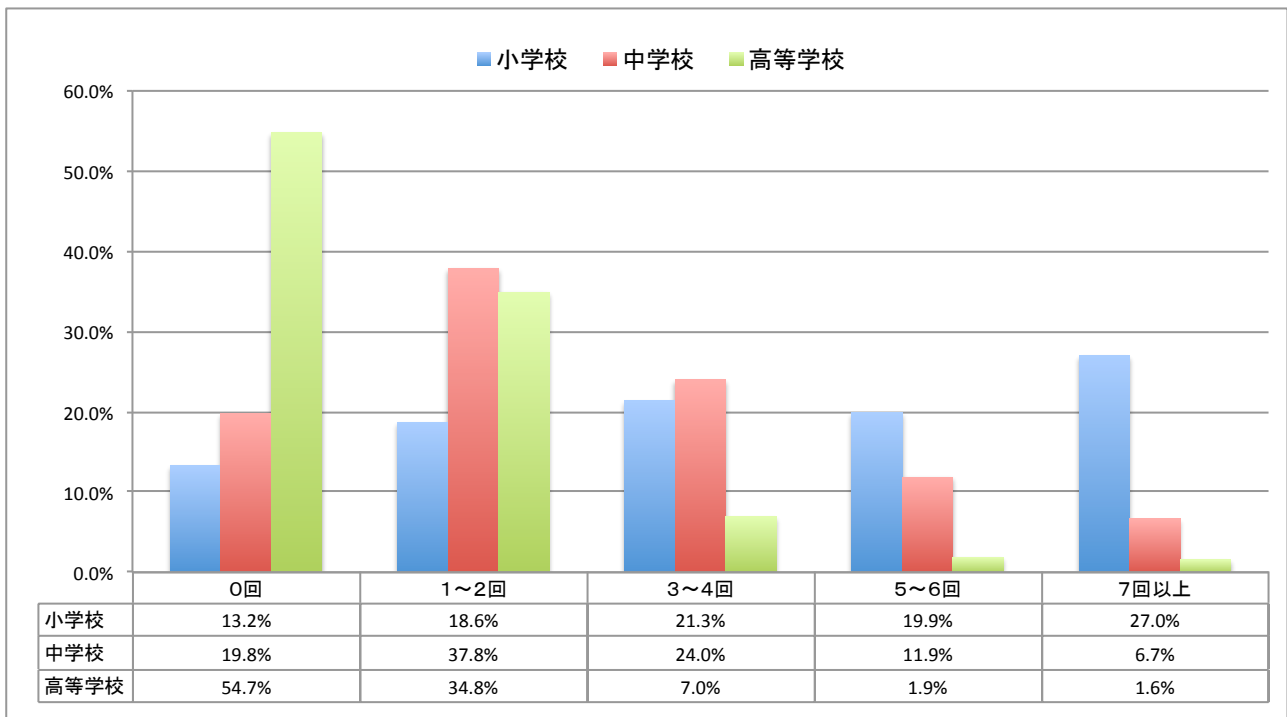


図 5 算数・数学以外の研究授業の参観回数

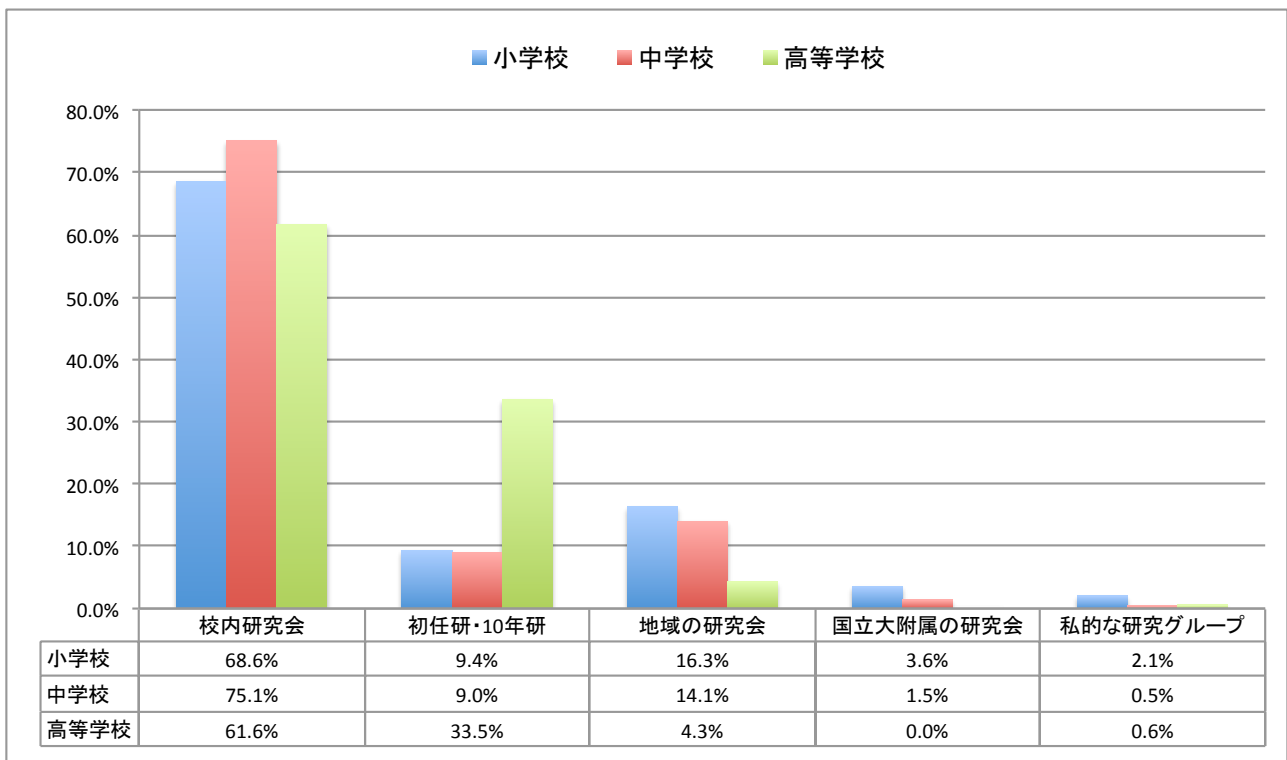


図 6 参観した算数・数学以外の研究授業のタイプ

Q6. あなたは昨年度、算数・数学の研究授業を授業者として実施しましたか。〔1つだけ〇〕

1. 研究授業を実施した →

2. 研究授業を実施していない →

4ページのQ10へお進みください

Q6「あなたは昨年度、算数・数学の研究授業を授業者として実施しましたか。」に対して、「1. 研究授業を実施した」と答えた者は、表7の通りである。

表7

	有効回答数	実施した
小学校	408	194 (47.5%)
中学校	405	231 (57.0%)
高等学校	316	127 (40.2%)
合計	1129	552 (48.9%)

Q6で「1. 研究授業を実施した」と答えた者のうち、算数・数学の研究授業を実施した回数の集計結果は図7の通りである。各校種とも「1～2回」が最も多く、小学校44%、中学校52%、高等学校35%であった。

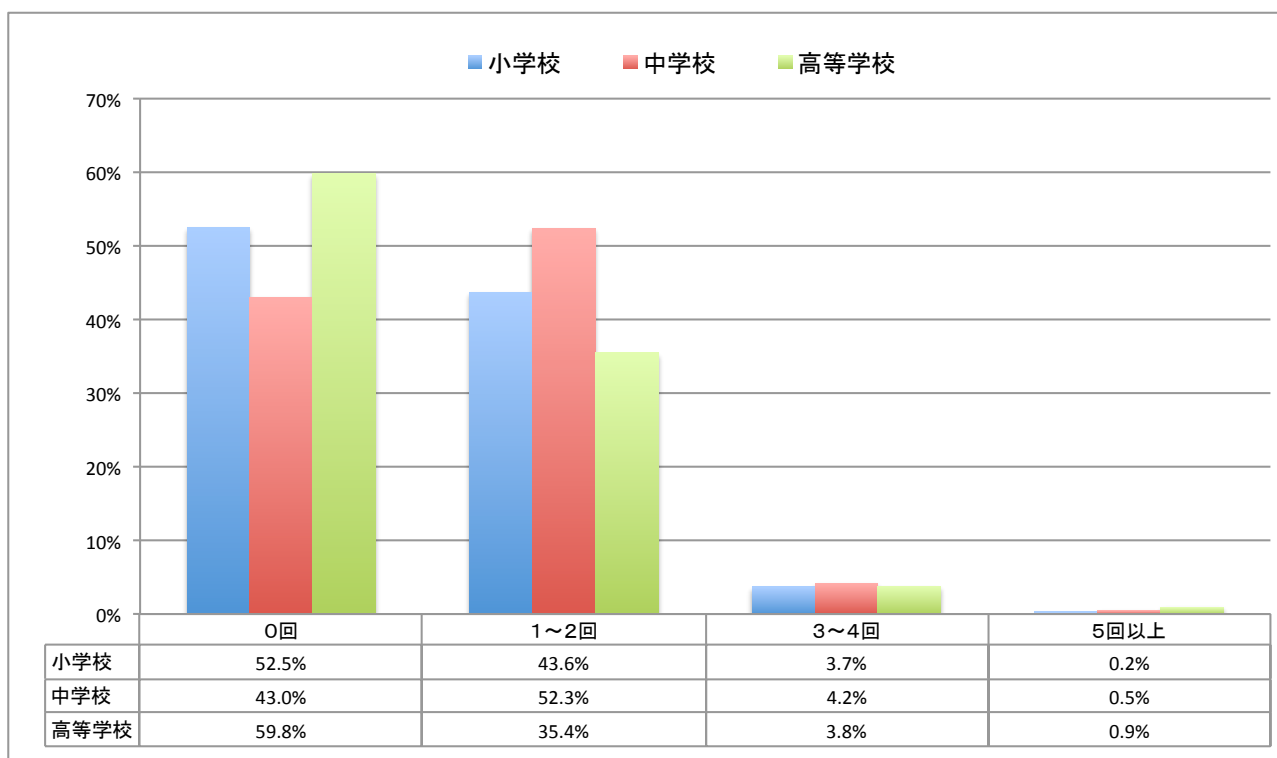


図7 算数・数学の研究授業の実施回数

なお、平成23年度に一度も算数・数学の研究授業を参観せず、かつ、実施もしていない教員は、小学校16%、中学校11%、高等学校21%であった。

Q6で「1. 研究授業を実施した」を選択された方にお聞きします

Q7. あなたが授業者として実施した算数・数学の研究授業の「位置づけ」「研究テーマ」「参観者」「協議会の有無」について最大3回分までお答えください。

研究授業①

A. 研究授業の位置づけ

1. 校内研究の一環として
2. 初任者研修や10年次研修等の一環として
3. 市・県・地域の研究会等の活動の一環として
4. 私的な研究グループの研究の一環として
5. その他

B. 研究授業を実施した際の研究テーマの有無

1. あった
2. なかった (例) 数学的活動、思考力、言語活動、学びあいなど

C. 研究授業の参観者【いくつでも○】

1. 勤務校の管理職
2. 勤務校のほぼ全教員
3. 勤務校の一部の教員
4. 他校の教員
5. 保護者
6. 指導主事
7. 大学等から招聘した助言者
8. その他

D. 研究授業後の協議会の有無

1. 協議会があった
2. 協議会はなかった

Q6で「1. 研究授業を実施した」と答えた者のうち、Q7「あなたが授業者として実施した算数・数学の研究授業の「位置づけ」「研究テーマ」「参観者」「協議会の有無」について」の集計結果は、下記(1)～(4)の通りである。

(1) 実施した研究授業の位置づけ(図8)

最大3回分の研究授業の合計に対する割合は、各校種で「校内研究会」が最も多い。高等学校では「初任者研修や10年次研修等の一環」が31%で、小・中と比べて多く、参観した場合と同様の傾向が見られる。

(2) 研究授業を実施した際の研究テーマの有無(図9)

高等学校では、55%の研究授業においてテーマがなかった。研究テーマのキーワードは、一つの研究授業に対して、複数のキーワードが記入されている場合もあったが、それらを単純集計し、校種ごとに多かったもの上位5つをまとめた結果が、表8である。

(3) 研究授業の参観者(表9, 表10, 表11)

校内研究会において、小学校では校内の管理職とほぼ全員の教員が参観している割合が35%を占めている。一方、中学校の校内研究会の参観者は、校内の管理職と一部の教員のみである場合が一番多い19%であり、高等学校の校内研究会の参観者は、校内の管理職と一部の教員のみである場合が最も多い38%、次に多いのが校内の一部の教員のみが参観する場合で32%であった。初任者研修や10年次研修等の一環の場合の参観者は、小学校は校内の管理職と一部の教員に指導主事が加わる場合が最も多く28%である。

中学校と高等学校においては、校内の管理職と一部の教員だけで参観するケースが多く、それぞれ 20%、56%であった。

(4) 研究授業後の協議会の有無 (図 10)

実施した研究授業 (のべ回数) に対する、協議会がなかった研究授業の割合は、小学校は 6%、中学校は 11% だったのに対して、高等学校は 22% あった。

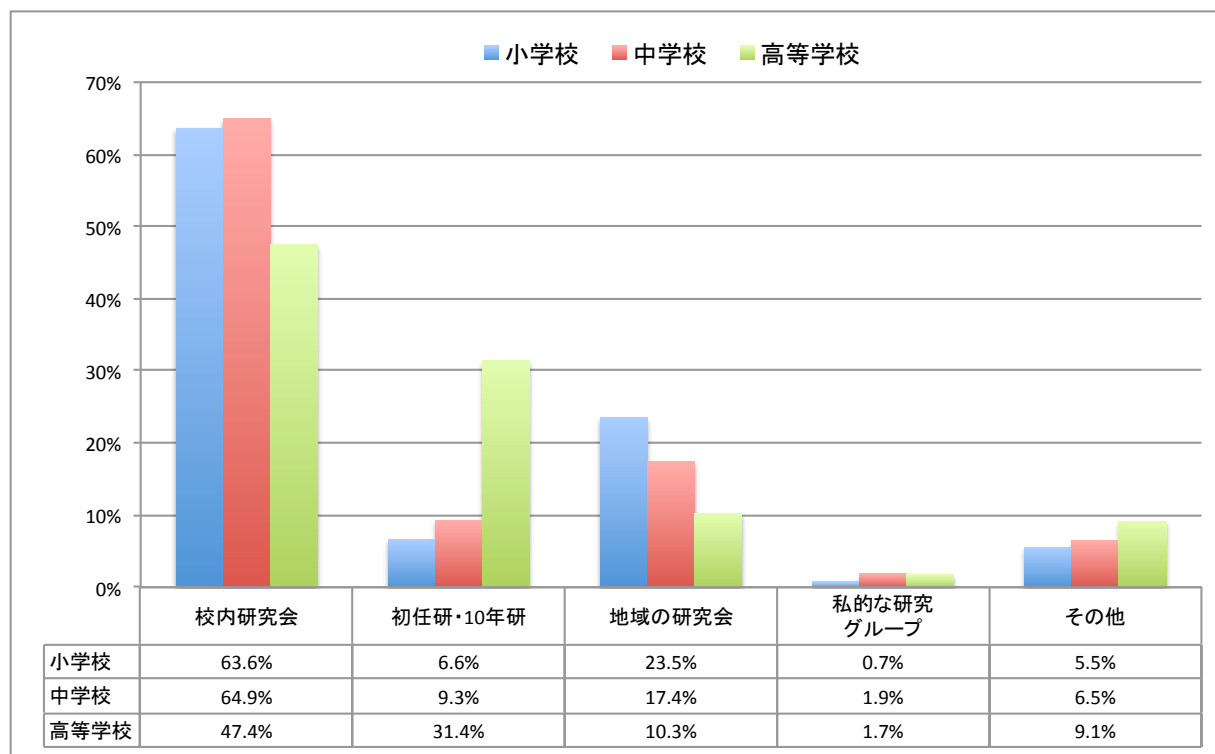


図 8 実施した研究授業の位置づけ

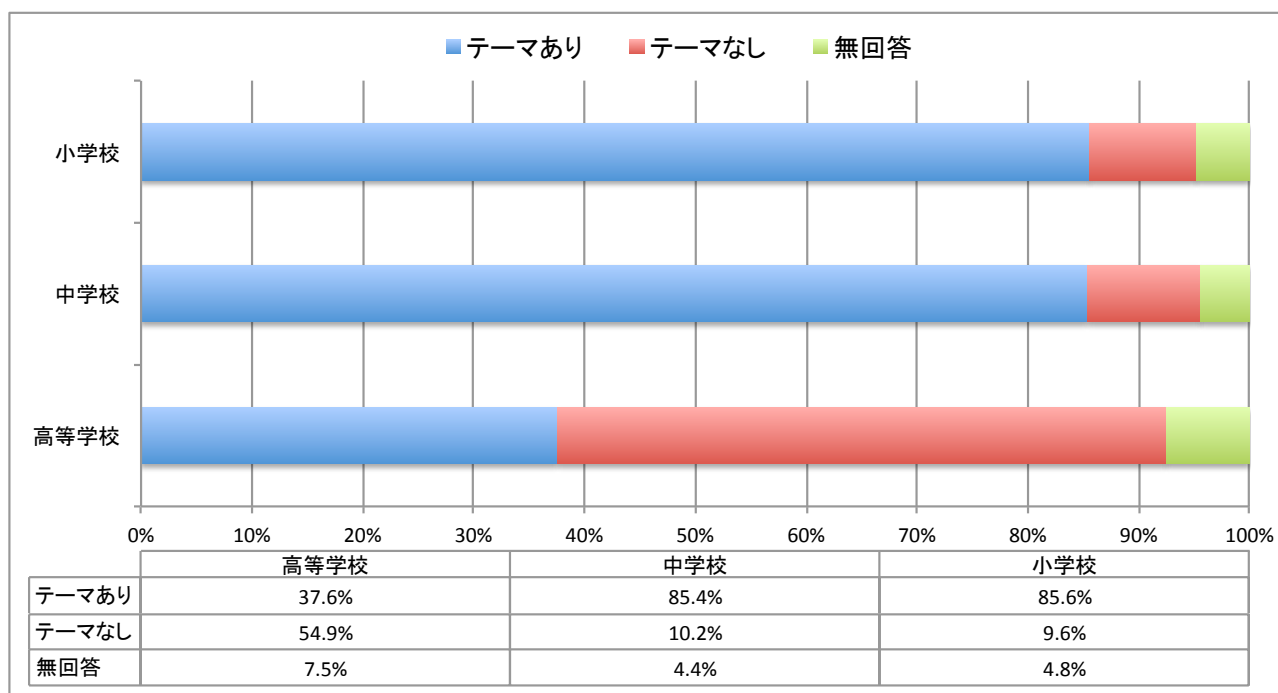


図 9 研究授業を実施した際の研究テーマの有無

表 8 研究テーマのキーワード

	小学校	中学校	高等学校
1	学び合い	言語活動	数学的活動
2	表現力	学び合い	思考力
3	思考力	表現力	理解／わかる
4	言語活動	数学的活動	特定の教材に関するもの
5	算数的活動	思考力	基礎学力

表 9 研究授業の参観者（全体）

	順位	管理職	全教員	一部の教員	他校の教員	指導主事	
小学校	1	●	●			●	12.8%
	2	●	●				12.4%
	3	●		●			9.3%
	4		●				8.9%
	5			●			5.8%
中学校	1	●		●			16.2%
	2	●		●		●	9.3%
	3	●	●				8.3%
	4	●	●			●	7.9%
	5			●			7.3%
高等学校	1	●		●			37.4%
	2			●			22.7%
	3	●		●		●	11.7%
	4	●		●	●	●	3.7%
	5	●					3.1%

表 10 研究授業の参観者（校内研究）

	順位	管理職	全教員	一部の教員	他校の教員	指導主事	
小学校	1	●	●				18.7%
	2	●	●			●	16.4%
	3		●				12.9%
中学校	1	●		●			19.4%
	2	●	●				10.7%
	3	●		●		●	10.2%
高等学校	1	●		●			38.3%
	2			●			32.1%
	3			●		●	11.1%

表 11 研究授業の参観者（法定研修）

	順位	管理職	全教員	一部の教員	他校の教員	指導主事	
小学校	1	●		●		●	27.8%
	2	●		●			16.7%
	3			●			0.1%
中学校	1	●		●			20.0%
	2	●		●	●	●	16.7%
	3	●				●	10.0%
高等学校	1	●		●			55.6%
	2			●			16.7%
	3	●		●		●	14.8%

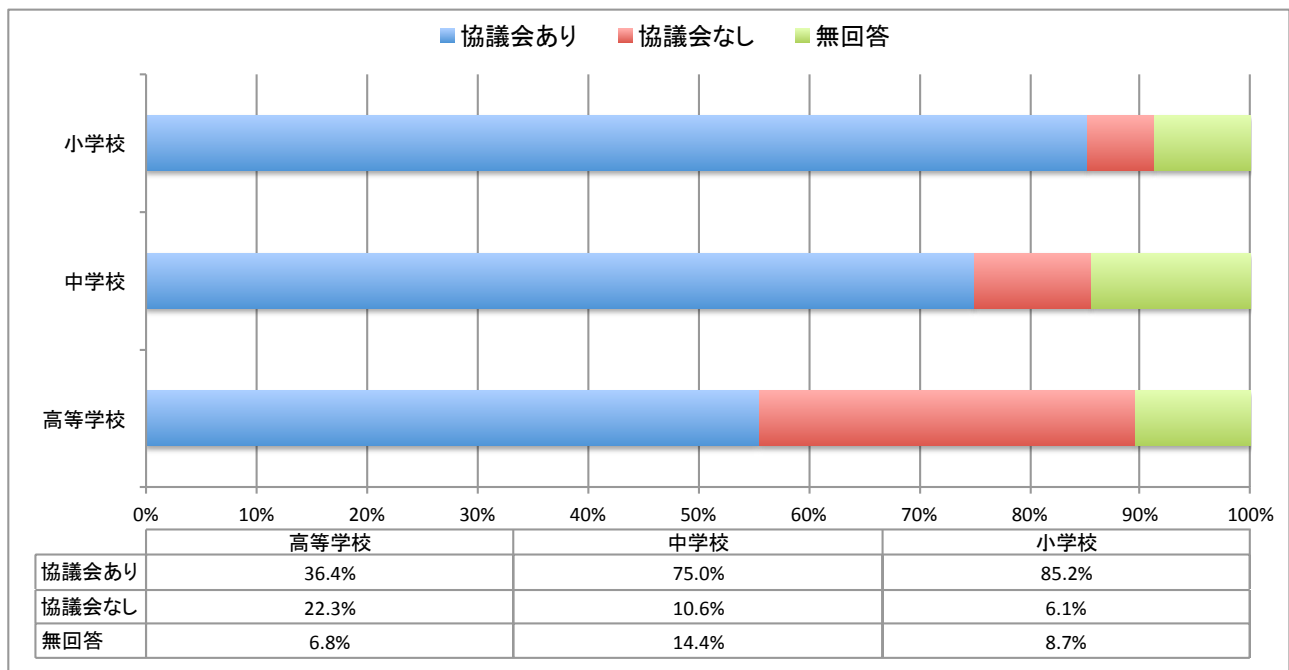


図 10 研究授業後の協議会の有無

Q6で「1. 研究授業を実施した」を選択された方にお聞きします

Q8. あなたは昨年度、算数・数学の研究授業のために学習指導案を作成する機会がありましたか。
〔1つだけ〇〕

1. 作成する機会があった 2. 作成する機会はなかった

→ Q10へお進みください

▼ Q8で「1. 作成する機会があった」を選択された方にお聞きします

Q9. 実施した各研究授業における学習指導案に関する以下のA～Fの質問について最大3回分までお答えください。

- A. 算数・数学の研究授業のために学習指導案を作成しましたか。〔各1つだけ〇〕
 B. 学習指導案に記載した内容はどのようなものでしたか。〔各いくつでも〇〕
 C. 学習指導案を事前に複数の教員で検討する機会がありましたか。〔各1つだけ〇〕
 D. 学習指導案をどなたと検討しましたか。〔各いくつでも〇〕
 E. 上記Dの検討の機会は、あなたが個人的に設定したものですか。〔各1つだけ〇〕
 F. 学習指導案を事前に管理職に提出し確認をとりましたか。〔各1つだけ〇〕

		研究授業 ①	研究授業 ②	研究授業 ③	
A	作成の有無	学習指導案を作成した	1	1	1
		学習指導案を作成していない	2	2	2
B	記載した内容	教材観	1	1	1
		児童・生徒観	2	2	2
		単元における本時の位置づけ	3	3	3
		本時の目標	4	4	4
		本時の課題	5	5	5
		主要な発問	6	6	6
		予想される児童・生徒の反応	7	7	7
		評価規準・評価基準	8	8	8
		板書計画	9	9	9
		その他	具体的に	10	10
C	検討の機会	検討する機会があった	1	1	1
		検討する機会はなかった	2	2	2
D	どなたと検討しましたか	①勤務校の算数・数学部会や数学科の教員	1	1	1
		②勤務校の研究主任	2	2	2
		③勤務校の管理職	3	3	3
		勤務校のその他教員（①～③以外）	4	4	4
		他校の教員	5	5	5
		指導主事	6	6	6
		大学等から招聘する助言者	7	7	7
		その他	具体的に	8	8
E	個人的設定	個人的に設定した	1	1	1
		それ以外	2	2	2
F	の管理職確認	確認をとった	1	1	1
		確認をとっていない	2	2	2

Q6で、「1. 研究授業を実施した」を選択した者のうち、Q8「学習指導案を作成する機会」の有無は、表12の通りであった。

表 12

	あった	なかった	合計
小学校	187(45.8%)	221(54.2%)	408
中学校	224(55.3%)	181(44.7%)	405
高等学校	91(28.8%)	225(71.2%)	316

Q8で「1. 作成する機会があった」を選択した者のうち、Q9「各研究授業の学習指導案」に関する集計結果は、下記(1)～(6)の通りである。

(1) 学習指導案作成の有無(表13)

(2) 学習指導案に記載した内容(図11)

指導案を作成した研究授業ののべ回数に対する、これらのすべてが書かれた指導案の割合は、小学校で32%、中学校で19%、高等学校で3%だった。また、「板書計画」を除くとそれぞれ55%、47%、16%だった。本来はすべて10割であるべきだが、8割を一つの目安とした場合、小学校では「板書計画」以外の8項目、中学校では「主要な発問」「板書計画」以外の7項目が8割を超えているのに対し、高等学校で8割を超えているのは「本時の位置づけ」「本時の目標」のみであった。特に、校種間における差が大きいのは、「予想される児童生徒の反応」「本時の課題」「板書計画」であった。「予想される児童生徒の反応」は、小学校で90%、中学校で81%であるのに対して、高等学校においては38%にとどまっている。

(3) 複数の教員での学習指導案検討の有無(表14)

学習指導案を複数の教員で検討したのは、小学校で87%、中学校で76%だったのに対し、高等学校は54%だった。

(4) 学習指導案を検討した相手(図12)

中・高等学校においては勤務校の数学科の教員が最も多く、大学等の助言者による検討の機会があった授業はごく限られていた。

(5) 学習指導案検討の機会の設定について(表15)

(6) 管理職の確認の有無(表16)

表 13 学習指導案作成の有無

	作成した	作成しなかった
小学校	236 (95.2%)	12 (4.8%)
中学校	284 (95.6%)	13 (4.4%)
高等学校	116 (95.1%)	6 (4.9%)

表 14 複数の教員での学習指導案検討の有無

	有	無し
小学校	211 (86.8%)	32 (13.2%)
中学校	217 (75.9%)	69 (24.1%)
高等学校	64 (53.8%)	55 (46.2%)

表 15 学習指導案検討の機会の設定について

	個人的に設定	それ以外
小学校	50 (22.1%)	176 (77.9%)
中学校	68 (28.9%)	167 (71.1%)
高等学校	33 (45.8%)	39 (54.2%)

表 16 管理職の確認の有無

	有	無し
小学校	197 (82.1%)	43 (17.9%)
中学校	208 (74.0%)	73 (26.0%)
高等学校	68 (58.6%)	48 (41.4%)

※括弧内は、無回答を除いた、実施した研究授業ののべ数に対する割合である(表 13～16 共通)。

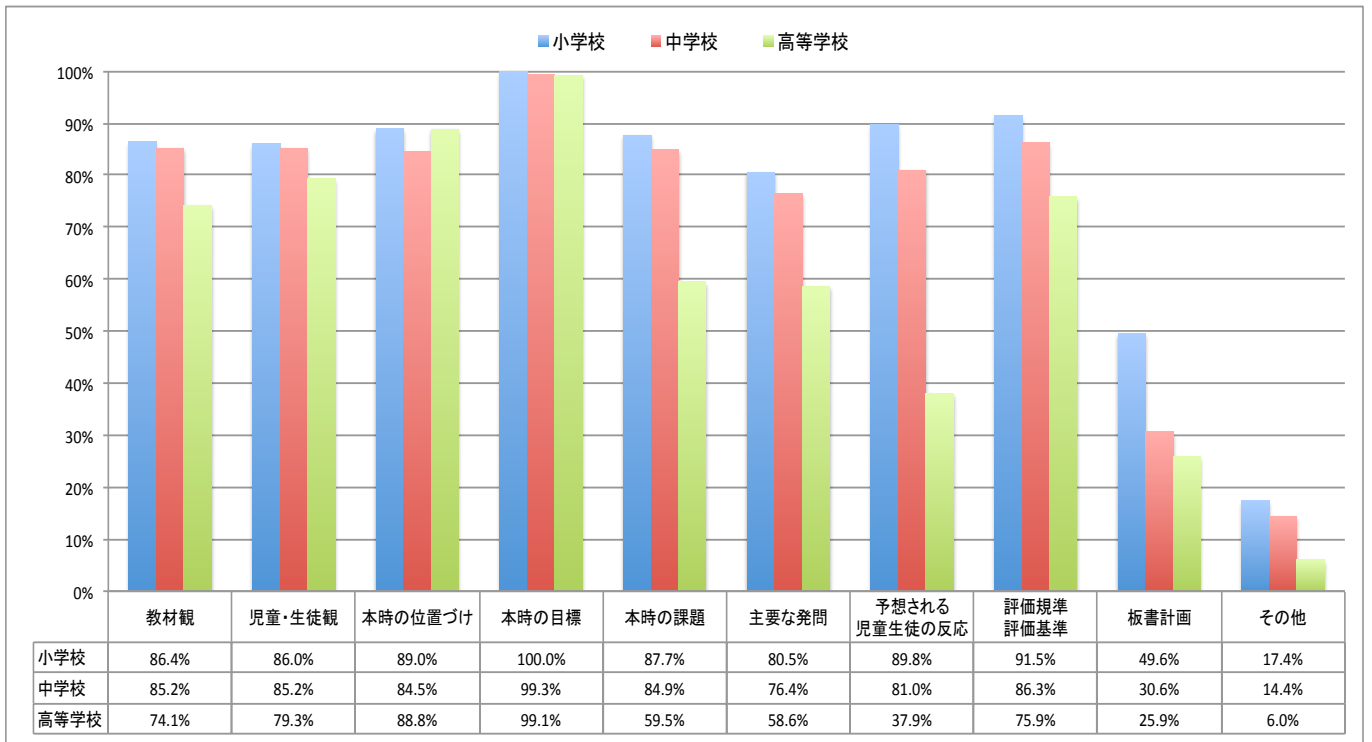


図 11 学習指導案に記載した内容

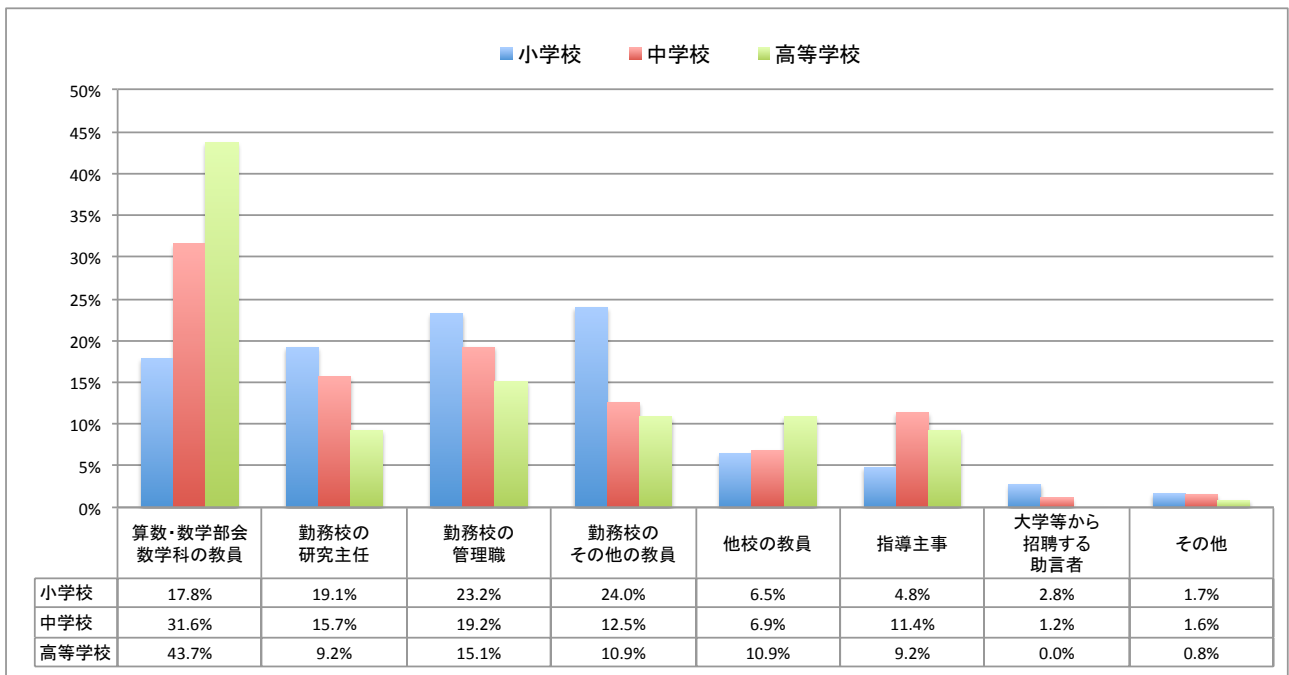


図 12 学習指導案を検討した相手

Q10. 算数・数学の研究授業を「授業者として実施する場合」と「参観する場合」において、重要だと思われる目的・理由を重要度別にそれぞれお答えください。〔各重要度別に1つだけ〇〕

	実施する場合			参観する場合		
	最重要	2番目	3番目	最重要	2番目	3番目
① 学習指導要領の目標の達成	1	1	1	1	1	1
② 教科書やカリキュラムの改善	2	2	2	2	2	2
③ 教材についての理解の深化、新しい教材の開発	3	3	3	3	3	3
④ 教師の指導技術・授業スキルの向上	4	4	4	4	4	4
⑤ 児童・生徒の思考の様相の理解	5	5	5	5	5	5
⑥ 児童・生徒の評価	6	6	6	6	6	6
⑦ 児童・生徒の学力を向上させる	7	7	7	7	7	7
⑧ 入学試験への対応の充実	8	8	8	8	8	8
⑨ 保護者や地域社会への説明責任	9	9	9	9	9	9
⑩ 目的はない（強制的だと感じている）	10	10	10	10	10	10
⑪ その他 <input type="text" value="具体的に"/>	11	11	11	11	11	11

Q10「算数・数学の研究授業を「授業者として実施する場合」と「参観する場合」において、重要だと思われる目的・理由」として、「最重要」に選択した上位5つをまとめた結果を示すと、図13、図14の通りであるⁱⁱ。

参観する場合の目的として「教師の指導技術・授業スキルの向上」を最重要とした教師の割合は、各校種とも最も高く、特に高等学校は46%と半数近くに及んでいる。

研究授業を授業者として実施する場合の目的としては、各校種とも「児童生徒の学力を向上させること」の割合が高い。一方、「教師の指導技術・授業スキルの向上」を最重要とした教師の割合は、小学校は14%だったのに対して、中学校は21%、高等学校は38%だった。

また、参観する場合と、授業者として実施する場合との間で、その差が顕著なのは、「児童生徒の学力を向上させること」である。

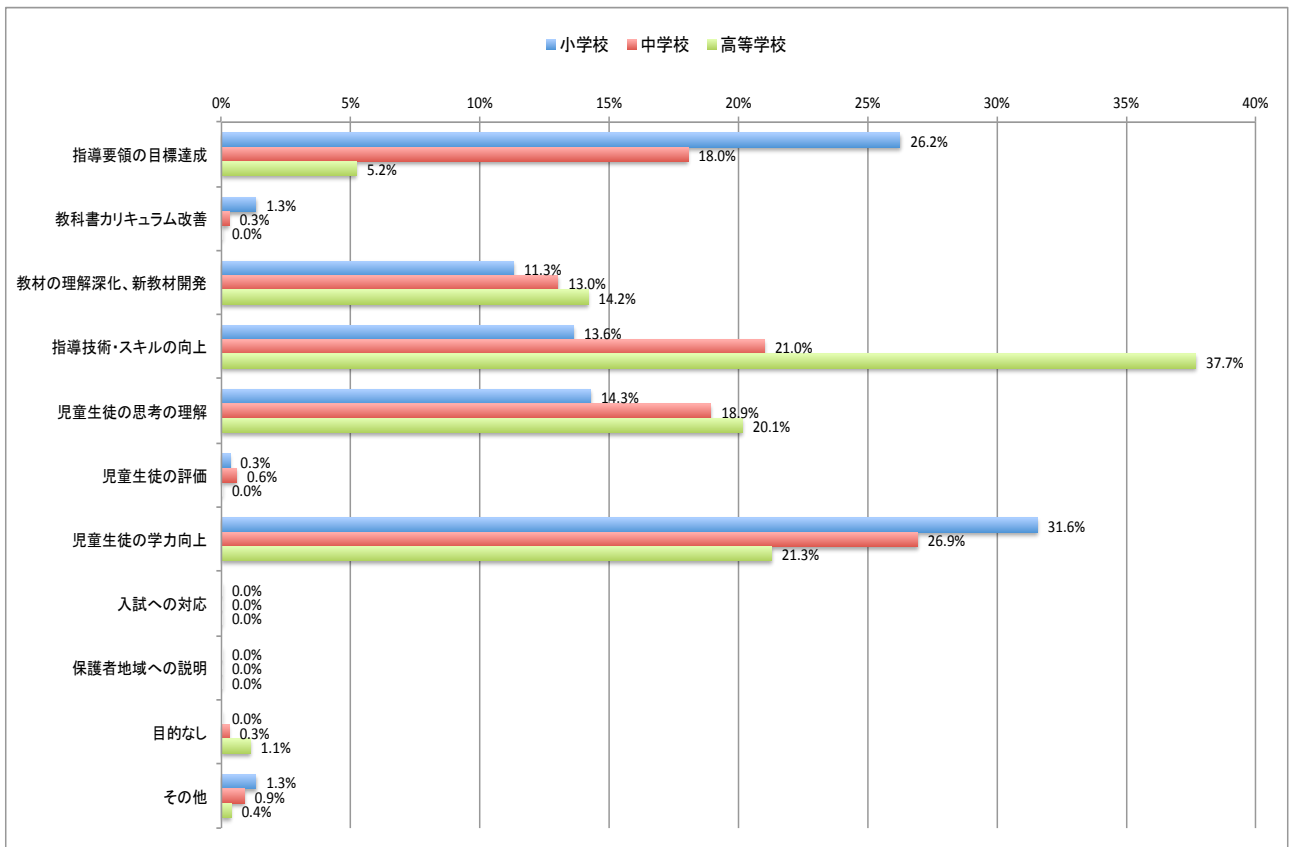


図 13 「授業者として実施する場合」に最も重要だと思う目的・理由

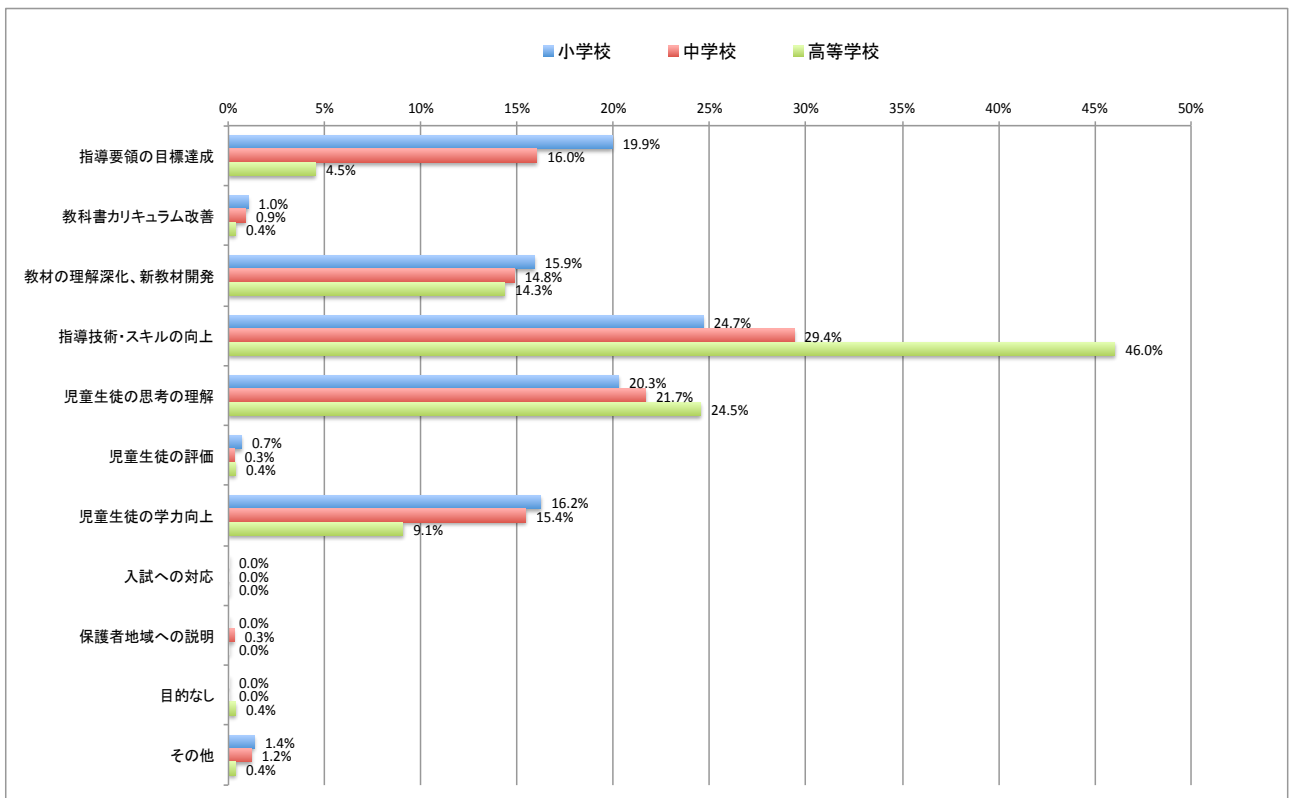


図 14 「参観する場合」に最も重要だと思う目的・理由

Q11. 算数・数学の研究授業を通して、あなたが一番学んだことは何ですか。自由にご記入ください。〔文字回答〕

Q11 では、「算数・数学の研究授業を通して、あなたが一番学んだことは何ですか。」に対する回答（自由記述）を分析した。そのために、以下のカテゴリーを設け、集計した。

指導スキル：説明，板書の仕方，課題提示の仕方等の指導方法に関すること，教具や ICT の活用に関すること

授業展開：「児童生徒中心の」「児童生徒の活動のある」「数学的活動を取り入れた」「学び合いのある」等の授業展開に関すること

目標：授業の目標やねらい，めあての設定に関すること

教材：教材研究，教材解釈，教材開発，教材の系統性，課題，教材観に関すること，単元構成に関すること

発問・手立て：主発問，補助発問，手立てに関すること

児童生徒理解：児童生徒の実態に即した指導や学力差に応じた指導に関すること，児童生徒の思考のプロセスの理解に関すること，学習指導案における児童生徒の反応の予想に関すること

研究授業の意義：他の教師（他教科，他校種を含む）と連携することや，他の教師の授業を見る・見られることの意義に関すること

自己認識：日々の自分の授業について反省や日々の努力の必要性に関すること，授業改善への意欲に関すること

その他：指導案のつくりかた，指導と評価の一体化，言語活動など

なお，複数のカテゴリーに当てはまるものは，複数のカテゴリーでカウントした。

校種別に整理した結果は，図 15 と表 17 の通りである。表中の割合は，本設問に無回答だった人数を（（小学校 22%（88 人），中学校 19%（75 人），高等学校 24%（77 人））を除いた人数に対する割合である。

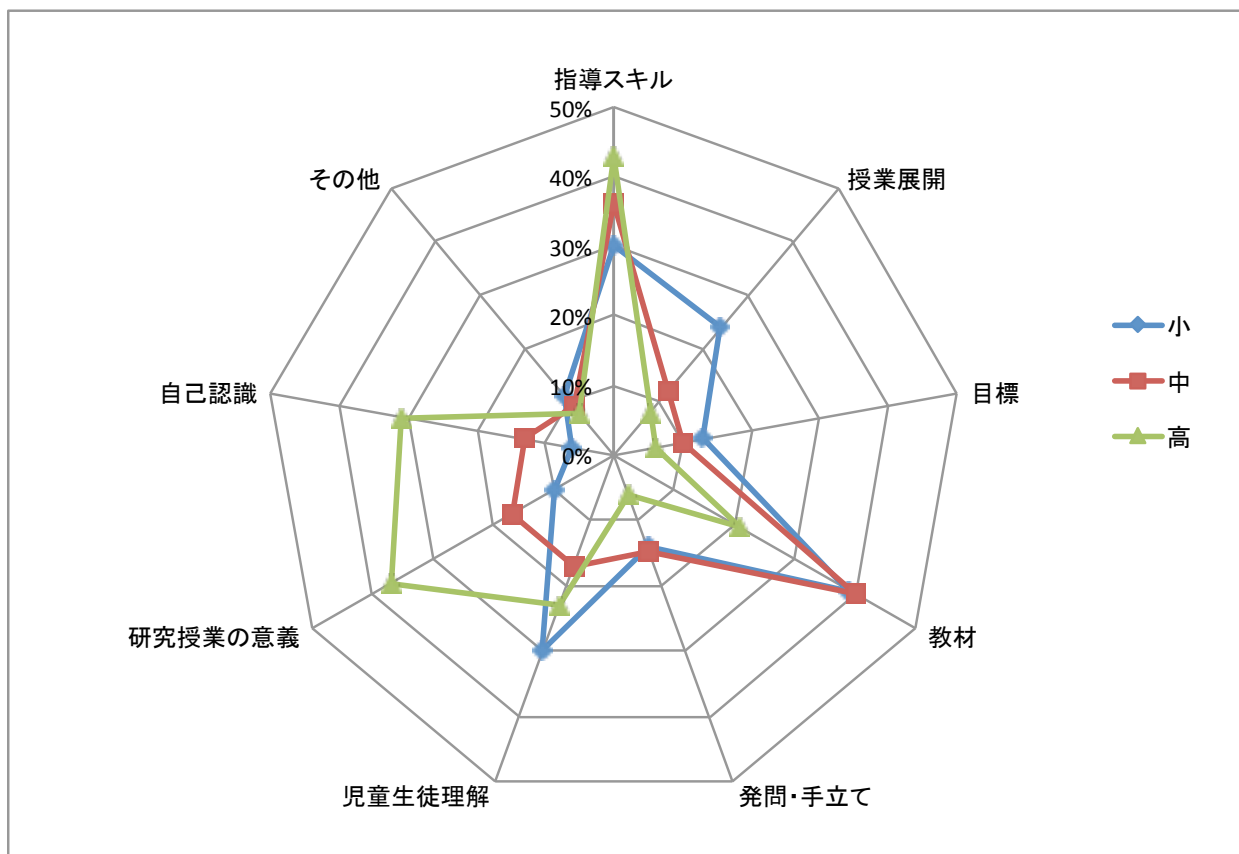


図 15 算数・数学の研究授業を通して一番学んだこと

表 17 算数・数学の研究授業を通して一番学んだこと

	小学校	中学校	高等学校
指導スキル	96 (30.0%)	120 (36.4%)	102 (42.7%)
授業展開	76 (23.8%)	39 (11.8%)	18 (7.5%)
目標	43 (13.4%)	34 (10.3%)	15 (6.3%)
教材	124 (38.8%)	132 (40.0%)	49 (20.5%)
発問・手立て	44 (13.8%)	50 (15.2%)	15 (6.3%)
児童生徒理解	97 (30.3%)	56 (17.0%)	54 (22.6%)
研究授業の意義	33 (10.3%)	55 (16.7%)	88 (36.8%)
自己認識	18 (5.6%)	43 (13.0%)	75 (31.4%)
その他	35 (10.9%)	30 (9.1%)	18 (7.5%)

どの校種でも、無回答者を除くと、およそ 35%の教師が「指導スキル」に関わる記述をしている。また、高等学校の教師では、「研究授業の意義」、「自己認識」に関わる記述をした教師が 30%を超えている一方で、「授業展開」「教材」に関わる記述をした教師はそれぞれ 8%、21%しかいない。小学校の教師は、「授業展開」「教材」が多く、「研究授業の意義」、「自己認識」が少なく、高等学校の教師とは逆の傾向である。中学校の教師は、その間に位置すると言えよう。

なお、小学校の教師の「授業展開」「教材」、高等学校の教師の「研究授業の意義」、「自己認識」の代表的な記述例は以下の通りである。

(小学校、「授業展開」)

- 「やはり、授業づくりそのものです。課題設定から振り返りまでの一連の活動をどう構築し、どう児童を支援していくかが学べるのは、研究授業ならではでないかと思います。」
- 「課題に対し、各自のつぶやきを大切にし、1つの解答例だけでなく、多様な解き方を導き出していること。自分の考えを持って解くだけに終わらず、少人数の話し合い活動を通し、お互いの考えを知らせあい、共通点や相違点を話し合い、考え方を深めていること。」

(小学校、「教材」)

- 「教科書が教材研究の入り口であるが、その教材の背景にあるもの、意図、関連等を、調べることで教材観が広がった。」
- 「算数の教材の持つ特色。系統性。大切な考え方。何を子どもたちにとらえさせるのかということ。子どもたちが、教材に対してどう課題意識をもち、どのような思考の流れを示したのかねらいを達成しているのかを考えることなど。」

(高等学校、「研究授業の意義」)

- 「生徒のつまづきが授業を行っている時よりも感じ、理解することができる。」
- 「他の教師の授業を見ることで、自分では気付くことのない事柄に気付かされることが多い。」
- 「どうしても毎年同じ授業になりがちだが、他の先生に見ていただき自分では気づかなかった点を指摘されたり、他の先生の授業を見ると刺激を受けます。」

(高等学校、「自己認識」)

- 「授業を客観的に見ることによって、授業者の授業と自分ならこう授業するというものが比較でき、改善点が見えてきた。」
- 「授業は生徒のためにあり、生徒を成長させるためには教師も成長しなければならないため、努力を惜しんではいけないということを学びました。」

以上

i それぞれの層別の有効回答率（所在地が未記入であった小学校 7.6%、中学校 6.3%を除く）は、次の通りである。

小学校	Ⅰ層	26%	Ⅱ層	36%
中学校	Ⅰ層	22%	Ⅱ層	40%
高等学校	Ⅲ層	41%	Ⅳ層	50%

小・中学校においてⅡ層の有効回答率がやや高くなっている点に留意する必要がある。なお、本稿では、層別の分析は行わないため、学校所在地が未記入であった回答も有効回答として分析を行った。

ii 回答方法を誤ったものについては、本設問の分析の対象から除いた。